



TITLE:

Jeffrey A. McNeely and Paul Spencer Schaczewski . Soul of the Tiger : Searching for Nature's Answers in Southeast Asia.
Honolulu: University of Hawaii Press, 1995,
390p.

AUTHOR(S):

渡辺, 弘之

CITATION:

渡辺, 弘之. Jeffrey A. McNeely and Paul Spencer Schaczewski . Soul of the Tiger : Searching for Nature's Answers in Southeast Asia. Honolulu: University of Hawaii Press, 1995, 390p.. 東南アジア研究 1996, 34(2): 437-437

ISSUE DATE:

1996-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56599>

RIGHT:

Jeffrey A. McNeely & Paul Spencer Sochaczewski. *Soul of the Tiger: Searching for Nature's Answers in Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1995, 390 p.

小説の書名のようなが、著者ふたりの20年以上にも及ぶ東南アジアでの人と動物（野生生物）とのかかわりの研究から、過去の両者の関係、現在のその変化の様子、そして、将来の両者の健全な関係のあり方を述べたものである。

著者の Jeffrey A. McNeely は現在 IUCN (International Union for Nature and Natural Resources, 国際自然連合) の生物多様性プログラム, Paul Spencer Sochaczewski (旧姓 Wachtel) は WWF (World Wide Fund for Nature International, 世界野生生物基金) の Creative development の責任者である。

本書の初版は Doubleday (1988) であるが、その後 Pragon House Pub. (1990), Oxford University Press (1991) などで版を重ね、今回 A Kolowalu Book (Univ. of Hawaii Press) から出版されたもので、かなり広く読まれているものらしい。

「太陽の神ガルーダ」、「白象」、「血のスポーツ」、「虎の魂」など30もの章から構成されているが、そのいくつかはシンガポール航空の機内誌 Silver Kris, あるいは Reader's digest などに掲載されたものを再録している。章ごとに、ふたりの得た体験・実話をもとに、文献・論文などで話に肉付けしたものである。会った人々との会話のかたちで話が進められるところが多い。しかし、著者のひとり McNeely の主滞在地タイから、もうひとりの著者 Sochaczewski の主滞在地ボルネオやジャワへ話が突然にとび、時にとまどいを感じるところがある。別々の体験を「わたし」として、記述していくためである。

まず、西洋では忌み嫌われる恐ろしい毒蛇キングコブラが東南アジアではナーガとしてヒンドゥ教の最高神ヴィシュヌ神を、仏教寺院ではブッダ像を護り、さらにイスラム教の優勢なインドネシアでも短刀クリスの中に波打った刃として象徴的に生きていること、また、インドネシアの象徴ガルーダも、もともとヴィシュヌ神の乗り物、不死身のガルーダそのものであることなど、宗教を越

えて東南アジアに存在する動物観を、歴史とのかかわりをもたせつつ述べる。

ついで、ボルネオのイバンは今日でも野生動物、とくに鳥を神の使者と信じ、その行動で予兆を確かめ、決めごとをする、あるいは東南アジアで広く行われていた首刈りが、現在では闘鶏・闘牛などの観戦型スポーツに置き換わっていることなど、過去の動物観、動物（野生生物）との興味深いかかわりが、まだ潜在的に現在、残っていることを述べる。「ジャングルの雪男」での中国を含めたアジア南部での「未確認熱帯アジア産ホミノイド」も読み物としては、おもしろい。

そして、現在、東南アジアがかかえる問題、すなわち、絶滅の危機に瀕する動物の保護策の実践と繁殖への取り組み、保護を妨げる社会条件、すなわち、動物の貿易・国際取引などを、あとのいくつかの章で述べる。ふたりが国際的な自然保護団体の活動家として、実際の保護事業にたずさわっていただけに、東南アジアの動物保護、その実践と挫折の体験談にもっとも力点がおかれ、ペットとしてのオランウータン、漢方薬犀角としてねられるサイ、医学実験用としてのサルなどの密猟、密輸の実態、国際取引の条約上の不備などがよくわかる。

最後に、人々と自然のかかわり・関係を変化させた4つの大きな生態文化革命 (ecological revolutions), すなわち、火の使用 (制御)、動物の家畜化と植物の栽培、灌漑、そして世界市場の発展を述べ、次の第5の生態文化革命は神話や人々の記憶の中に残されている伝統的な知識や洞察力を敬い、認識することで達成されるもので、その第5革命こそが現代社会が永遠の自然保護を達成でき、野生生物との共存ができるものだとして強調する。しかし、東南アジア各地で進行中のダム建設など開発によって、自然が大きく破壊されている現実を紹介しながら、どうすればいいのか、具体的な方法はやはり記述していない。

なお、本書には「ソウル・オブ・ザ・タイガー 東南アジアの人と自然」(野中浩一訳, 心交社 1993) として訳書がでている。

(渡辺弘之・京都大学農学部)